

「ではないか」の用法について

張 興*

キーワード: 発見, 判断結果の提示, 自己所有情報の想起, 認識の確認要求

要 旨

発見, 確認要求といった用法を持っているといわれている現代日本語の「ではないか」をめぐって, これまでの研究は, 主として認識の確認要求用法を焦点として行われてきたが, 認識の確認要求以外の用法についてはあまり記述していない. 本稿では, 判断結果の提示, 自己所有情報の想起をはじめ, これまで指摘されていない用法, および発見, 評価の提示, 認識の確認要求といった用法の統語的特徴を記述し, 認識の確認要求用法とそれ以外の用法との関係を考察して, 「ではないか」の全貌を把握することを試みた.

1. はじめに

現代日本語の「ではないか」¹は, 発見, 確認要求といった用法を持っているといわれている.

* ZHANG Xing: 洛陽外国語学院日本学研究センター講師.

¹ 日本語の否定疑問文, 特に「ではないか」という形式を含む全ての否定疑問文に関して, 全面的な考察を行った研究としては, 田野村(1988)がまず挙げられる. 田野村(1988)は, 構文・音調・意味上の区別から「ではないか」という形を取る全ての文を大きく次のような三種類に分けている.

第一類の「ではないか」は, 発見した事態を驚きなどの感情を込めて表現したり, ある事柄を認識するよう相手に求めたりするものである. 「ナイ」を含むとはいえ, 前に来る表現の内容が否定されているわけではない.

やあ, 谷村じゃないか.

何するんだ. 危ないじゃないか.

第二類の「ではないか」は, 推定を表現する. この場合も, 話し手は前の表現の内容を否定してはならず, むしろ, それを認めるほうに傾いている.

(谷村の不審な様子から)どうも, 犯人は谷村じゃないか.

(空模様を見て)雨でも降るんじゃないか.

第三類の「ではないか」においては, 「ない」が否定辞本来の性格を発揮する.

(犯人は谷村でないと教えられて)そうか, 犯人は谷村じゃないか.

(鯨が魚デナイト君八言ウガ得心デキナイ.) 本当に鯨は魚じゃないか?

本論文で「ではないか」としているのは, 田野村(1988)の第一類である. また, 田野村(1988)の第一類に属する, 意向や誘いかけを表す「(よ)う」と連続して使用する「ではないか」を本論文の対象外とする.

これまでの研究は、主として「ではないか」の確認要求用法を焦点として研究しているが、確認要求以外の用法として使用される「ではないか」についてはあまり記述していないと思われる。本稿では、確認要求以外の用法として使用される「ではないか」の用法、及び確認要求以外の用法と確認要求用法との関係等について記述してみる。

2. 問題の提起

「ではないか」については、田野村(1988)は、「発見した事態を驚きなどの感情を込めて表現したり、ある事柄を認識するよう相手に求めたりするものである。『ナイ』を含むとはいえ、前に来る表現の内容が否定されているわけではない」と指摘している。その後、この指摘に基づいて、森山(1989, 2000)、安達(1991, 1999)、蓮沼(1993, 1995)、三宅(1994, 1996)、鄭(1994, 1995)、宮崎(1996)等は、基本的に「ではないか」の用法として「発見」と「確認要求」を立て、「ではないか」の形態的特徴や意味・機能等について考察してきた。これらは、非常に有益なものである。しかし殆どが確認要求の機能だけに注目しているため、形式自身の基本的な意味・機能と、確認要求とそれ以外の用法との関係等についてはあまり論じていない。

また、これまで指摘された用法に入りにくい現象もある。例えば、

- (1) ~気管は陸上生活をする昆虫の一大発明である。さて、陸上の動物にとって気管がそれほどいいものなら、もっと大きい陸上動物も気管を使えばいいではないかと思われるが、現実には昆虫の仲間以外、気管を使っているものはいない。なぜだろう？ また、最大サイズの昆虫は、せいぜいカブトムシ程度で、もっと大きい昆虫がいけないのはどうしてだろうか？ これらの疑問を解く鍵も気管自身がもっていると思われる。(ゾウの時間ネズミの時間)
- (2) 理屈の組み立てはまさにそうだった。しかし、その想定から出発すれば、安田は翌朝の七時二十四分の急行で博多を東に出発しなければならない。その《さつま》は京都に二十時三十分に着き、四十四分に発車するというのに、彼は、そのとき、北海道札幌駅に河西とにこやかに会っているではないか。河西が嘘をつくとは思えない。いや、疑問はなかった。札幌の旅館丸窓が玄関に安田を迎えたのは、二十一時ごろなのである。しかるに《さつま》はその時刻、近江の琵琶湖畔を走っているところであろう。この論理と現実の矛盾をどうするか。(点と線)

のような例は、発見や確認要求とは言いにくい用法である。したがって、「ではないか」に関する複雑な意味・用法について今一度考える必要があると思われる。

3. 分 析

本稿では、「ではないか」の用法を規定するに当たり、聞き手の認識し得る情報を提示して話し手と共通的な認識を聞き手に要求するか否かによって考察していく。聞き手に共通認識を要求しない場合、新しい事態を発見するといった「発見」をはじめとする四つの用法に分類する。通常

の意味における「発見」によって表現できなくなると、評価の意味を伴う命題を提示する場合、「評価の提示」と呼んでおき、先行文脈や前提等に対立する場合、「判断結果の提示」「自己所有情報の想起」と呼んでおく。聞き手に共通認識を要求する場合、「認識の確認要求」と呼ぶ。以下それぞれを考察することにする。

3-1. 共通認識を要求しない場合

3-1-1. 発見

「ではないか」は、眼前で発生した新しい事態を発見する場合、「発見」の用法になる。発見を表す「ではないか」は、次のような文に使用されるものである。

- (3) こんどは同じ線の下りを見る。十四時五十分函館を出た急行《まりも》は、小樽に十九時五十一分に着くではないか。その間一時間七分の幅がある。安田は小樽駅でゆっくりと待って《まりも》の客になることができるのだ。彼の乗った列車は、ふたたび札幌の方へ逆戻りする。稲村氏にはその直後に顔を見せたに違いない。(点と線)
- (4) ~腰から下は歩いても痛くはない。材木で打ったのか背中が馬鹿に痛い。仕方がないので洗面所に辿りついて水道栓をひねってみた。水が出るではないか。洗面所の柱はそのまま立っていた。先ず手背の土を洗い落とし、誰かが物干場に忘れていた褌で手を巻いた。強度の近視の私には、薄暗くて遠方ははっきり見えなかった。誰もいなかった。(黒い雨)

(3) のように、「ではないか」は、話し手が同じ線の下りを見て「十四時五十分函館を出た急行《まりも》は、小樽に十九時五十一分に着く」という新事態等を見出すことを表す。(4) は、通常水道栓をひねると、水が出るのだが、爆弾が爆発した後の尋常でない状況では、水が出ない可能性があると思いながら、期待感を持ってひねってみた結果水が出たのを発見したという例文である。

発見を表す「ではないか」は、発見を表す条件複文に出現したり、「なんと」という感嘆を表す副詞と共に起したりすることができる。

まず、発見を表す「ではないか」は、「と」条件複文の主節に現れ得る。

- (5) ~私は正面のポーチを上り、合鍵で扉をかけ、アトリエを横ぎり、彼女の部屋を調べるために屋根裏へ昇って行きました。そしてその部屋のドアを開いて、一歩中へ踏み込んだ瞬間、私は思わず「あっ」と云ったなり、二の句がつけずに立ち竦んでしまいました。見るとそこには、浜田が独りぼつ然として臥ころんでいるではありませんか! (痴人の愛)
- (6) 筋は詳しく言うまでもないだろう。御釈迦様が、蜘蛛の糸を一本、垂らす。天から下がってきた蜘蛛の糸にすがって、健陀多はよじのぼり始める。途中で気がつくと、あとから無数の罪人がのぼってくるではないか。(天声人語 1993, 03, 28)
- (7) それに、益々自信を失ったのは、こんな大事なときに、ふと気づいてみると、例の緑化週間のポスターにまじまじと見入っているではないか。(デンドロカカリヤ)
- (8) 「聞いてくれ給え。昨日の夕方、僕はこの寺の風呂に入って見た。一日働いて疲労れているところだったから、入った心地は格別さ。明窓の障子を開けて見ると紫意の花なぞが咲いてるじゃないか。その時僕はそう思ったねえ。風呂に入りながら蟋蟀を聴くなんて、成程寺らしい趣味だと思ったねえ。今までの下宿とは全然様子が違う——まあ僕は自分の家へでも帰ったような心地が

したよ」(破戒)

(5)~(8)から分かるように、「と」の直前に現れた動詞は、「見る」「気がつく」「気付いてみる」というような感覚器官で観察する動作を表す動詞が多い。豊田(1979)の指摘したように、「と」は、このような動詞につく場合には、後続文が発見した内容を表す。「ではないか」は、発見された内容に付加して、発見時の情報を提示する。

次に、発見を表す「ではないか」文には、「なんと」「なんて」といった感嘆を表す副詞が生起できる場合である。

- (9) 稲垣: 水上の姉さんが貸してくれた。これが水上の大事にしていた御守だよ。
健太郎: 左手で受け取って、右手で軽く叩きながら、
健太郎: ドンマイ、ドンマイ、シマッティコーゼ。
公鷹: なんと、うちの御守じゃないか。(闇に咲く花)
- (10) ~マサルは、ガサゴソと小枝に飛び移って.....小指をそっと窓に近付けた。/すると、まるで待っていたようにカーテンが開いたのだ。/マサル「あっ.....!」/顔を出したのは、何と古沢先生ではないか。~(白い手)

これらの例から、感嘆を表す「なんと」「なんて」といった感嘆副詞が「ではないか」文の中に生起できることが分かる。「なんと」と「だろうか」との共起はよく指摘されているが、「ではないか」文の中に生起する現象はこれまで指摘されたことがない。例文から考えると、「なんと」「なんて」と「だろうか」が共起する場合は、その命題になるのが評価や感覚、判断等話し手の感覚を表すものであるのに対して、「なんと」「なんて」と「ではないか」が共起する場合は、その命題内容になるのは、話し手の発見した新しい事態である。そのため、「ではないか」文は、話し手が新しい事態を発見した瞬間の驚嘆の意味を帯びるのである。

後続文が発見した内容を表す条件節「と」と感嘆を表す「なんと」は、「ではないか」文に同時に出現することもある。

- (11) ~都塵を離れ、武蔵野の自然美にうっとりしたのを覚えている。此处に越して来た当座、そんな記憶がしきりと湧いた。ところが住んでみると、何と土埃だらけではないか。ことに京口の間借りする部屋は、この道路に面したガレージの二階だけに、よけいひどかった。(春の草)
- (12) 「はじめはカッとなりましたね。負けたと思ったんですよ。ところがあなたの身元をさぐってゆくと、なんとこれが息子の先生じゃないか。~」(裸の王様)
- (13) だが今はそんなことより欽弥と律子の行先を突止めることが第一の問題だ。私はじっとしているに耐えず、控室から講堂裏をぬけて、一応教室をのぞきに行った。階段を二段ずつまいで行くと、肥った私は忽ち息切れがする。上りつめた所でちょっと深い呼吸をしていると、何と、銘仙に着換えた律子が、星子に手を引っぱられてやって来るではないか。やや、上気したには、薄く化粧しているようすであった。(あさくさの子供)

「発見」の「ではないか」は、主として現象描写的なものに付加するが、命題が評価性や判断作用等を伴う内容であれば、「発見」と言いにくくなる。これらを、「評価の提示」「判断結果の提示」「自己所有情報の想起」と呼んでおく。

3-1-2. 評価の提示

評価の提示とは、話し手が「ではないか」によって自分の評価を提示する用法である。蓮沼（1993）では、これを「話し手の評価を感情を込めて聞き手に訴えるもので、聞き手との共感が見込める場合には『ねえ』に近似する表現となる」としている。安達（1999）では、このような文は聞き手の存在しない状況にも使用できると指摘している。この用法は、新たな状況に遭遇する面では、発見の用法に連続する。

（14）は独話、（15）（16）は対話で使用されて評価の提示の「ではないか」である。

- （14） 私たちの社会ではまだ、子どもたちがボランティアの心を自然に身につけることのできる文化は育っていない。いや、そう断言するのは早すぎるかもしれない。山形県の高校生たちのボランティア活動の報告集を読んだ。読むうちに、日本の普通の高校生もなかなかやるじゃないか、という思いがわいてきた。（天声人語 1990, 09, 13）
- （15） 「よお、元気そうじゃあないか」（あした来る人）
- （16） 「なかなかいいアパートじゃないですか。二階ですか」（あした来る人）

（14）は、話し手が報告集を読むうちに高校生のボランティア行為に感心することを表すものである。（15）（16）は、それぞれ聞き手の健康状態と、聞き手が泊まっているアパートに対して評価をする例文である。

次の二例も評価の意を含む用法である。

- （17） ～それから守は宗教に志し、渋谷の僧に就いて道を聞き、領地をば甥に譲り、六年目の暁に出家して、飯山にある仏教の先祖と成ったという。なんとこの発心の歴史は味のある話ではないか。世の多くの学者が答えることの出来ない、その難問に答え得るものは、信心あるものより外に無い。こう住職は説き進んだのである。（破戒）
- （18） 「それなら話は別だ。なんてまあ、可愛い恋文ではないか。この風流を見習いなさい。同い年でも、お前などは話にもならぬ他愛なさだ」（新源氏物語）

（17）（18）は、「ではないか」が「だろうか」に置き換えられる例である。この場合、通常「なんと」「なんて」と共起できる。「なんと」「なんて」と共起できる特徴からも、発見の用法に共通する面があることが分かる。

- （17'） なんとこの発心の歴史は味のある話だろう。
- （18'） なんてまあ、可愛い恋文だろう。

ただし、このような例は、聞き手が存在する場合、後述する「認識の同一要求」という用法に近くなる。

3-1-3. 判断結果の提示

判断結果の提示とは、話し手がよく考えたあと、ある結論に到達したことを表す用法である。新規情報を獲得する点では、発見の用法に連続する。

- （19） 引き返そうか、という考えが頭を過ぎたが、これまで来た泥を、帰って行くことも、出来そうな

気がしなかった。ままよ、行けるところまで行って、動けなくなったら、殺されてもいいではないか。死ぬまでだ。これまでも幾度か、そう自分に納得させて来たではないか。(野火)

(19)の「これまでも幾度か、そう自分に納得させて来た」から分かるように、話し手がいろいろ判断した後下した判断の結果を「ではないか」で表現している。この場合、「ではないか」は、「思う」「考える」「気がする」等、心理活動、思考活動を描写する動詞の補文によく使用される。つまり、「ではないか」は、話し手が何らかの心理活動を通じて、ある結論に到達したことを宣言する標識である。条件節の「たら」「ば」「なら」等の接続助詞、因果関係を表す「では」「から」「ため」等の接続助詞、「それでは」「だから」等の接続詞を使用する「ではないか」文があるのに対して、接続助詞や接続詞等の論理的な関係を表すものが直接出現できず、文脈の間の論理関係で成立するものもある。

(20)(21)(22)は、「では」「から」「以上」という接続助詞を用いて、前後の文の論理関係を表すものである。

- (20) 財政再建が至上命題とされたのは、第2次石油ショック後の1980年度からだ。以来10年間、予算要求の段階から厳しい基準を設けて行財政改革に取り組んだ結果、ようやく赤字国債を出さなくてもすむ状況にたどりついたのである。ここでタガをゆるめてしまったのでは、元も子もないではないか。(朝日新聞1989, 09, 01)
- (21) 自分は甘えているなと杏子は思った。あとで後悔するかもしれない。でも、これだけ楽しいのだから、構わないではないか。ゆれている、ゆれている。——杏子はいま自分が歩いているこのすばらしい酩酊の道がどこまで続いているだろうかと思った。(あした来る人)
- (22) ある!と思う。自分だけが克平を愛していることだ。八千代の手許から克平を奪おうというのではない。彼女の夫の愛情を要求しようというのではない。ただ自分は彼を愛しているだけなのだ。一度心の中に飛び込んで来てしまった以上、その彼への愛情を、いまはもう消すことはできないではないか!(あした来る人)

条件文を使って判断を表現する場合、「ではないか」文の命題内容は話し手が現場(背景)で起こった事態に対して自分なりの理由をもって判断したものや、「ば」「なら」「たら」等による論理関係によって導き出したものである。現場で起こった事態に対する場合は、話し手が社会的一般通念や、話し手自身が積み重ねた生活経験や、客観的状況から判断したものであるが、推論過程がいつも明らかであるわけではない。論理関係によって導き出される場合は、「ではないか」文の命題が条件表現としての「ば」「なら」「たら」等を通して得られるものである。

- (23) 「これまでは日本農業のため、米だけはなんとしても守らなければならないと考えていた。しかし、おいしくて安い米があるならどこから輸入したっていいではないか、という気になってきた」(朝日新聞1986, 08, 10)
- (24) つまり、天動説から地動説に変わったということが、宇宙の認識対象だけの問題でしたら、別に地動説でも構わないではないかと一応は思われます。(日本文化のかくれた形)
- (25) 新しい、異質な世界を体験すれば、そこには新しい経験ができるではないか。(般若)

(23)~(25)は、それぞれ話し手が条件表現としての「なら」「たら」「ば」を用いて前件から

後件としての「ではないか」文を導き出したものである．後件としての「ではないか」文と前件は一種の論理関係になる．例文(1)もこのタイプである．

また，論理関係を表すマーカーが直接現れないが，文脈の論理関係等から判断の帰結を表す「ではないか」もある．

- (26) ～それはほとんど，(螳螂の斧をふるって竜車に向う)という諺に似たようなものだ．彼等の人生は予定通りに行かない人生，予定を立てることさえも不可能な人生，したがって躓きの多い人生であるに違いない．躓いたら損をする．またそこから出直さなくてはならない．つまずかないように前以て用心し，正確な足どりで，安全な道をえらんで，危なげのない歩き方をすることが絶対に必要ではないか．……江藤賢一郎の考え方はどこまでも実利的だった．(青春の蹉跎)
- (27) ～自分の生涯でも，いまこの時期は，相当苦しいさびしい時であるに違いないと思う．克平と別れようとしている．いくら気が合わなくても，長年一緒に暮して来た夫である．その夫から別れようとしている．そうした自分にとっては容易ならぬ時期の小さい旅に，少しぐらいぜいたくしたって構わないではないか．(あした来る人)

(26) は，「躓いたら損をする．またそこから出直さなくてはならない」から，「つまずかないように前以て用心し，正確な足どりで，安全な道をえらんで，危なげのない歩き方をすることが絶対に必要である」と判断を下すものである．(27) は，「そうした自分にとっては容易ならぬ時期の小さい旅に」という状況を表す成分から，「少しぐらいぜいたくしたって構わない」という結論を下したものである．

「判断結果の提示」を表す「ではないか」は，話し手がもともと所持する不明な情報に対する確定情報を獲得するという自問納得の場合に使用できる²．つまり，話し手が解けない疑問についていろいろ思考を巡らして突然気付いたものを「～ではないか」という形式で表現できる．

- (28) いろいろな型の自動車が走ってゆく．三原は興味のないその流れを見てぼんやりしていた．退屈だから頭脳の思考が働いたのかもしれない．彼は口の中で，あっとつづやいた．
なんというつかさだろう．名前は一人の必要はなかったのだ．べつべつな名前で予約を申しこんでもよいではないか．安田は自分で日航事務所に行かずに，べつべつな人間を使いにして申しこんだであろう．～(点と線)
- (29) 三原の目は喜びに燃えた．
(やった！)
と思った．安田の小細工が，かえって，彼自身が飛行機を利用したことを証明したようなものではないか！(点と線)

(28)(29) は，それぞれ話し手としての「三原」がよく考えたあと，その発話以前に気付くことができる，考えられるけれども気付かなかったり，頭に浮ばなかったりする情報を意識した，気付いたことを表す文である．これらの文は，話し手の固定的な判断や説明等を述べ立てるものではなく，話し手がある状況の中で新しく獲得した情報を述べ立てるものである．

「ではないか」は，「判断結果の提示」を表す場合，話し手が情報を持たない状態から情報を持

² 仁田(1987, 1991)等を参照していただきたい．

つ状態になる変化を表すため、「発見」の用法に近い特徴を示している。

3-1-4. 自己所有情報の想起

自己所有情報の想起とは、話し手自身が経験したこと、知っていること、信じていること、一般的知識等、話し手の記憶の倉庫にすでに存在している情報を想起する用法である。あることに對して、矛盾のある情報を呼び起こして疑問を感じる場合と、ある判断を下したりある行動を取ったりする時、そのように判断する原因やそのような行動を取る理由を自分で想起したりする場合に使用される。

まず、疑問の原因になる「ではないか」文から考察していく。

- (30) (しかしはたして飢饉が来るか)
 というのは、赤兵衛の疑問である。その飢饉も、美濃だけならばよし、もし京都周辺まで凶作ならば買いつける米がないではないか。(国盗り物語)
- (31) なぜ露出した腸が凄惨なのであろう。何故人間の内側を見て、悚然として、目を覆ったりしなければならぬのであろう。何故血の流出が、人に衝撃を与えるのだらう。何故人間の内臓が醜いのだらう。……それはつやつやした若々しい皮膚の美しさと、全く同質のものではないか。(金閣寺)
- (32) それにしても、分らない……女が、あの賽の河原に、なぜあれほど執着しなければならないのか、さっぱりわけが分らない……「愛郷精神」だとか、義理だとか言っても、それを捨て去るときに、一緒に失うものがあって、はじめて成り立つことではないか……いったい彼女が、失う何を持っていたというのだ？(砂の女)

(30) は、話し手は、言われたとおり米を買いつけることができれば、飢饉にならないと思っているので、疑問を感じることを表す例文である。(31)(32) も、話し手が自分の所持する常識、考え等を根拠に、疑問を感じる例である。例文(2)も論理上の推理と現実の情報には矛盾が起こって話し手の心理に疑問が生まれるものである。

また、推論、行動の根拠になる情報を想起する例は次のようである。

- (33) 鳥飼は、それは少しおかしいな、と思った。現に佐山とお時とは情死しているではないか。(点と線)
- (34) いつか、杏子は自分が克平を憎んでいるのに気がついた。憎んで当然だと思う。あれ以後、花火の晩の事など、克平は全く忘れ去った顔をしているではないか。まるで、あれが夢でもあったと言うように。(あした来る人)
- (35) おれは今後も登美子との関係をつづけて行くだらう。それは生活の潤いとして必要だ。しかしおれは登美子に被害を与えはしない。二人の関係が結婚にまで進まないからと言って、女の方が被害者だと考えるのは間違いだ。第一、登美子自身が関係の継続をしきりに望んでいるではないか。それは彼女の自由意志だ。自由意志による行為によって、彼女が被害者になるという論理は有り得ない。……(青春の蹉跎)
- (36) ~「まあ、待て」と丑松は自分で自分を制止めた。あの先輩と自分との間には何か深い特別の関係でも有るように見られたら、どうしよう。書いたものを愛読してさえ、既に怪しいと思われているではないか。まして、うっかり尋ねて行ったりなんかして——もしや——ああ、待て、待て、日の暮れるまで待て。暗くなってから、人知れず宿屋へ違いに行こう。こう用心深く考えた。

(破戒)

(33)～(35)は、それぞれ「それは少しおかしい」「憎んで当然だ」「女の方が被害者だと考えるのは間違いだ」と話し手が思う原因を「ではないか」文で示すものである。(36)は、話し手が自分の行為を「ではないか」文で示すものである。

疑問の原因を表す文でも推論の根拠を表す文でも、「ではないか」は、話し手が自分の情報の倉庫裏に存在する知識や情報をサーチして、疑問の原因や推論の根拠、行動の理由になる知識や情報を提示する機能を果たしている。

以下の二例の「ではないか」文は、その命題内容が、話し手の一つの判断であると同時に、話し手の別の判断や疑問、行動の原因や理由にもなる。

- (37) 曾根は、しかし、上京してだれからも相手にされなくても、たいしてへこたれなかった。出版さがしの交渉は一応打ち切って、金を出す人を探そうと思う。これだけ東京に人がうようよ居るのだから、一人ぐらい、百万円の出版資金を出してくれる奇妙な人物がいても不思議はないではないか。必ず居るに違いない。それにぶつかるかぶつからないかだけの話である。(あした来る人)
- (38) 八千代にくらべたら、杏子など問題ではないではないか！ 克平はあの運動選手のような若いわか女のどこがいいというのであろう。曾根には克平の気心が判らなかつた。しかし、いくらそんなことを考えていても始まらなかつた。～ (あした来る人)

(37)では、「一人ぐらい、百万円の出版資金を出してくれる奇妙な人物がいても不思議はない」というのが「これだけ東京に人がうようよ居る」という原因による判断であるが、これは同時に、「金を出す人を探す」という行動を行う原因である。(38)では、「杏子など問題ではない」というのが、話し手が「八千代にくらべる」ことから判断を下したものであるが、同時に「克平は何故杏子が好きなのか」という疑問が生まれる原因である。(37)(38)における「ではないか」は、「判断結果の提示」と「自己所有情報の想起」の二重の働きを果たし得るものである。

3-2. 共通認識を要求する場合

聞き手に共通認識を要求する「ではないか」の用法は通常「認識の確認要求」と呼ばれているが、本稿では、これにしたがう。認識の確認要求とは、話し手が聞き手の認識し得る情報を提示して聞き手に共通認識を達成させるものである。この用法は、命題が聞き手も共有できる情報が話し手の現場の判断かという点において、共有知識の確認要求と認識の同一要求に下位分類できる。

3-2-1. 共有知識の確認要求

共有知識の確認要求とは、話し手が、対話現場に存在する事実や、話し手と聞き手の過去における経験等といった話し手と聞き手が共有できるとされる情報を聞き手に提示して聞き手の知

識を活性化させるものである。

- (39) 「衝きあたらないように行けばいいのよ、……ほら、御覧なさい、あの人だって彼女を突ッ切って行ったじゃないの。だからいいのよ、行って見ましょうよ」(痴人の愛)
- (40) 「おい、顔をこすっちゃいかんぞ」と僕は、矢須子に注意した。「手に、コールタールか何か、附着しているじゃないか。しかし、よく帰って来た。もうちょっとのところで、宇品の通運へ探しに行くところだった」(黒い雨)
- (41) 「母さん、もう一つおくんな」と省吾は訴えるように、「進には二つくれて、私には一つしかくれねえだもの」
「お前は兄さんじゃねえか」
「進にはあんな大いのをくれて」(破戒)
- (42) 青木「何言ってるの。お前女じゃないか」
正子「あたし、春雄の仇が討ちたい」(シコ)
- (43) 「それならばそれでいいと思います。——だって、好きになっている時だけ恋愛すればいいとおっしゃったじゃありませんか」(あした来る人)
- (44) 「東京の支店ができ上がったので、まあ、自祝の意味で、何となく人を招ぶんだ。いろんな人が来るから、曽根君にはいってもらっても別に可笑しいことはない。曽根君にもいいだろう。金を集めるには——」
「でも、お金できたじゃありませんか。藤川さんから」(あした来る人)
- (45) 「～でも人間誰しも欠点というのはあるじゃない? それに私は一介のピアノの教師にすぎないわけだし、そんなのどうだっていいといえいいことでしょ、人間性だとか性格だとか? ～」(ノルウェーの森)
- (46) 「そりゃ間違いです」と江藤は青白い顔に歪んだ笑いを浮べて言った。「だって、学生なんか日本中に何十万人もいるじゃないですか。加害者が学生だから、それが即ち僕だなんて、それでは論理が飛躍していますよ」(青春の蹉跎)

(39)(40)は、話し手が対話現場に存在する情報を聞き手に提示して認識させたり、注意したりするものである。(41)(42)の命題は、身分、性別等、聞き手に関する知識等である。これは、聞き手の自覚を促す場合に多用される。(43)(44)は、話し手が「ではないか」を用いて話し手と聞き手の過去における経験等を聞き手に提示して記憶の倉庫から呼び起こさせるものである。(45)(46)は、話し手が一般的な知識という共有可能な情報を聞き手に提示するものである。

3-2-2. 認識の同一要求

認識の同一要求とは、話し手が具体的な状況や一般的知識等に基づいて推論したものや、談話の話題とする仮定知識、話し手だけが知っていること等を聞き手に提示して同様の認識状態になるよう要求する場合に「ではないか」を使用する用法である。

- (47) 「それじゃ送って行かなくなっちゃいけないじゃないか」(蒲団)
- (48) 「少なくとも積極的に応援はしてくれないな」
「応援したくてもできないじゃありませんか。どう応援したらいいんです? 山登りがいやじゃあないわ。そうね、わたし、自分が応援できないのがいやなの」(あした来る人)
- (49) 「こいつ、とっても面白いんだ。俺がいたずらを叱ったりするじゃない。そうすると、泣くかわりに、すぐお世辞笑いをするんだ」(一瞬の夏)

- (50) 「どうしてか……うん、そうだね、たとえばさ、子供の頃、遠足なんかに行くじゃない。みんなはカメラで綺麗な山とか湖とかを撮ったりするんだけど、俺は違ってたんだよね。通りすがりの汚ないワラビ屋根の家とか、壊れかかった納屋のある家とか、そういうのばかり写してたんだ」(一瞬の夏)

(47)(48)は、現場判断を提示するものである。命題になるのは、話し手が具体的な状況や一般的知識等に基づいて推論した結果である。(49)(50)は、仮定知識を提示したり、例を挙げたりするのに使用されるものである。話し手が聞き手との間で、仮定や想定に基づいて仮の状況や話題を構築して話を進めるために使われるものである。

3-3. 「ではないか」の各用法の関係

以上、「ではないか」の用法を、聞き手に共通認識を要求するかどうかにより、発見、評価の提示、判断結果の提示、自己所有情報の想起と、認識の確認要求に分類することを提案したが、これは、それぞれ顕著な構文的特徴と意味的特徴に基づいて分類したものである。各用法の間には連続する面があるので、截然と分類できるわけではない。例えば、発見、評価の提示、判断結果の提示といった用法は、話し手が発話時に当たってある情報を獲得する点では連続する面を示している。自己所有情報の想起を表す場合も、話し手の記憶倉庫から情報を呼び出す点では情報の獲得に似ている面がある。

また、認識の確認要求を表す「ではないか」を共有知識の確認要求と認識の同一要求に分けているが、共有知識の確認要求とは、話し手が、自分が知っていると同時に聞き手にも認識できる、持っているとして認定している情報を、聞き手に提示して確認を求める用法であり、認識の同一要求とは、話し手が、自分の下した判断や、仮定したこと、聞き手が知らなくても想像できるという自分所属の情報を、聞き手に提示して、同一の認識状態になるよう要求する用法である。両者に共通しているのは、聞き手が情報を認識できる、所持している、仮定できる、想像できると判断したうえで、話し手が情報を聞き手に提示して自分と同じ認識を形成するよう要求するという点である。

さらに、「ではないか」の用法としては、発見、判断結果の提示、自己所有情報の想起といった用法と、認識の確認要求の用法に密接な関係が存在する。聞き手にも認識できる、判断できるといった条件がととのえば、発見と自己所有情報の想起は、共有知識の確認要求に移行でき、判断結果の提示は、認識の同一要求に移行できる。勿論なことに、聞き手所有の情報を想定することにより、認識の確認要求用法としての適応範囲が拡張していく。

このほか、認識の確認要求とそれ以外の用法にまたがる現象も存在する。たとえば、

- (51) 「おい庄吉さん、滅多なことを口にするな。——おい、魚が来ると、浮子を引いとるじゃないか」
(黒い雨)
- (52) 「そんな分らないことを云うもんじゃないよ、ね、いい児だからそうおし、その代り何か着物を

買ってやるから。——そう、そう，お前は洋服が欲しいと云っていたじゃないか，だから洋服を
 拵えて上げよう」（痴人の愛）

のように，(51) は話し手の発見を表すと同時に，聞き手も認識し得るという条件の下で聞き手に
 注意するという認識の確認要求用法にもなるが，(52) は，「そう，そう」から分かるように，本
 来自己所有情報の想起という用法であるが，聞き手に発話しているため，認識の確認要求という
 用法にもなったものである。

認識の確認要求であってもそうでない用法であっても，「ではないか」文の命題内容による話し
 手の獲得した情報あるいは本来所有している話し手の情報と，文脈や前提によって表現された情
 報とに，ギャップが存在している。これは，「ではないか」の構造成立に深く関係しているのであ
 る。

4. おわりに

本稿では，「ではないか」の用法を発見，評価の提示，判断結果の提示，自己所有情報の想起と，
 認識の確認要求に分類し，それぞれ各用法の統語的特徴や関係等について分析した。これらの用
 法は，厳密に区別できるものではなく，相互に連続するものであるが，根底にはなにか基本的な
 ものが機能しているのであろう。今後さらに考察を深めていく必要がある。

謝 辞

本稿を執筆するにあたり，仁田義雄先生，安達太郎先生，田野村忠温先生，徐一平先生，胡振平先生等か
 らご意見，コメントをいただきました。ここに記して深く感謝する次第であります。また，本稿掲載に当た
 り，匿名査読の二名の先生に数多くの貴重なコメントをいただいたことをも深く感謝申し上げます。

参 考 文 献

- 安達太郎（1991）「いわゆる『確認要求の疑問表現』について」『日本学報』10，大阪大学文学部日本学研
 究室。
 ———（1999）『日本語研究叢書 11 日本語疑問文における判断の諸相』，くろしお出版。
 井上 優（1994）「いわゆる非分析的な否定疑問文をめぐって」『国立国語研究所報告 107 研究報告 15』，
 国立国語研究所。
 国立国語研究所（1960）『話しことばの文型（1）——対話資料による研究——』，秀英出版。
 田野村忠温（1988）「否定疑問文小考」『国語学』152。
 ———（1990）『現代日本語の文法 I——「のだ」の意味と用法——』，和泉書院。
 鄭 相哲（1994）「所謂確認要求のジャナイカとダロウ——情報伝達・機能論的な観点から——」『現代日本
 語研究』1，大阪大学文学部日本語学科現代日本語学講座。
 ———（1995）「ネとダロウとジャナイカ——確認要求形式——」『日本語類義表現の文法（上）』（宮島達
 夫・仁田義雄編），くろしお出版。
 仁田義雄（1987）「日本語疑問表現の諸相」『言語学の視界』，大学書林。

- (1991) 『日本語のモダリティと人称』, ひつじ書房.
- 蓮沼昭子 (1993) 「日本語の談話マーカー『だろう』と『じゃないか』の機能——共通認識喚起の用法を中心に——」『第1回小出記念日本語教育研究会論文集』.
- (1995) 「対話における確認行為『だろう』『じゃないか』『よね』の確認用法」『複文の研究(下)』(仁田義雄編), くろしお出版.
- 三宅知宏 (1994) 「否定疑問文による確認要求的表現について」『現代日本語研究』1, 大阪大学文学部日本語学科.
- (1996) 「日本語の確認要求的表現の諸相」『日本語教育』89.
- 宮崎和人 (1996) 「確認要求表現と談話構造」『岡山大学文学部紀要』25, 岡山大学文学部.
- (2000) 「確認要求表現の体系性」『日本語教育』106.
- 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃 (2002) 『新日本語文法選書 4 モダリティ』, くろしお出版.
- 森山卓郎 (1989) 「認識のムードとその周辺」『日本語のモダリティ』(仁田義雄・益岡隆志編), くろしお出版.
- (1992) 「疑問型情報受容文をめぐる」『語文』59, 大阪大学国語国文学会.
- (2000) 「基本叙法と選択関係としてのモダリティ」『日本語の文法 3 モダリティ』(森山卓郎・仁田義雄・工藤 浩著), 岩波書店.